

第十一回 張翼徳大いに長坂橋を鬧がせる、諸葛亮群儒と舌戦す

— 諸葛亮の舌戦 —

(前回から今回まで)

前回のめざましい活躍をみせた趙雲につづいて、今回は張飛の名場面からです。

『三国志』では、張飛と関羽は「万人の敵」と称されています。

郭嘉かくか(曹操の参謀)が曹操に、「劉備は英雄の風格をもち、部下の心をつかんでいる。張飛と関羽は、いずれも「万人の敵」であり、劉備のためなら喜んで死ぬような連中です」と劉備主従を評価しました。このほか、程昱ていいくも、関羽・張飛を「万人の敵」と評しています。これが曹操側の共通認識でした。「敵」は文字通りの「敵」ではなく「匹敵する」という意味です。また「張飛の雄壮・猛威は、関羽に亜つぐ」ともありますので、関羽が第一、張飛が第二という順序じょれつです。

しかし前にも少し触れましたが『三国志演義』の張飛は、かなり誇張したキャラになっています。『三国志』には「豹の頭」「燕の領あこ」「虎の鬚ひげ」「奔馬ほんばのよう」などの記述はありませんし、また、禁酒の誓いを破つて徐州を失うなど酒癖さけぐせの悪いうっかり者となりますが、

張飛が酒を飲む記述はありません。『三国志演義』では、暴れん坊でうっかり者、いつも無茶を言つて劉備に叱られるなど、庶民に親しみやすい豪傑ごうけつキャラになっています。

(本文抄)

さて、文聘ぶんべいは軍勢を率い趙雲を追つて、長坂橋ちやうはんきやうまでやつて来たが、見れば、張飛が虎のような鬚ひげをさか立て、ドングリ眼をむき、手に蛇矛じやぼうをつかんで、橋の上に馬を立てているではないか。

まもなく曹仁そうじん・李典りてん・夏侯惇かこうとん・夏侯淵かこうえん・楽進がくしん・張遼ちやうりやう・張郃ちやうこつ・許褚きよちよらもそろつて到着したが、張飛が目をいからせて矛ほこをかまえ、橋の上に馬を立てているのを見るや、諸葛亮の計略ではないかと恐れ、誰も前進しようとしなない。かくて、橋の西に一列で整列すると、人をやつて曹操に急報した。

曹操はこの知らせを受けるや、急いで馬に乗り後方からやつて来た。

張飛はドングリ眼をカツと見開き、後方に、青絹の傘・旄ぼう（牛の尾を竿の先に飾つた旗）・黄鉞かうえつ・旌旗せいき（軍旗）を目にするや、曹操がようすを見に来たのだと思い、声を張り上げて怒鳴つた。

「われこそは燕人張翼徳なり。命がけて勝負をする者はおらんのか」

その声は雷鳴のようで、聞いた曹操軍は思わず足を震わせた。

曹操は、左右の者をかえりみて言った。

「以前、雲長が申しておったが、翼徳は百万の軍勢に向かったときも、袋のなかから物を取り出すように、簡単に敵の大将の首を取るそうだ。悔あなじつてはならんぞ」

その言葉が終わらないうちに、張飛はまた目をむいて怒鳴った。

「燕人張翼徳えんひとここにあり。命がけて勝負する者はおらんのか」

曹操は張飛の凄まじい気迫に恐れをなし、後ろへ退すまこうとした。

張飛は曹操の後方が動きはじめたのを見るや、矛をかまえ、また怒鳴った。

「戦うのか、逃げるのか、はつきりしろ」

その声が終わらないうちに、曹操の側にいた夏侯傑なつこうけつがあまりの恐ろしさに肝きもをつぶして、

馬から転がり落ちた。

曹操はくるりと馬首をめぐらせて逃げはじめたので、大将たちも浮き足立ち、いつせいに逃げ出した。

(解説)

張飛が長坂橋ちやうはんきやうで曹操の大軍を食い止めたので、劉備はなんとか落ちのびることができました。

『三国志』張飛伝は、「(劉備は)張飛に二十騎を指揮させて背後はいごを防がせた。張飛は川をたてにして橋を切り落とし、目をいからせて矛を小脇にかかえ『わが輩は張益徳ちやうえきとくである。かかつて来い。命がけの勝負をしようぞ』と呼ばわった。誰も思いきつて近づこうとはせず、そのため先主(劉備)は助かった」と、張飛がここを先途せんとと、裂れつばくの勢いで曹操軍を食い止めたことを記します。

この記述をもとに、『三国志演義』はさらに脚色して、張飛の最初いっかつの一喝に曹操軍はみな足を震ふるわせ、二度目の雷鳴らいめいのごとき大声に曹操は恐れをなし、三度目の怒鳴り声で夏侯覇が落馬し、それを機に曹操を先頭に逃げ出したとつづけます。

こうして、趙雲や張飛の奮戦で虎口ここうを脱した劉備は、なんとか呉と境を接する夏口かこうまで落ちのび、救援に駆けつけた劉表の長男劉琦りゅうきと合流します。しかし、軍需物資が備蓄びちくされていた江陵は、結局、曹操に奪われてしまいます。

そのとき、孫権のブレーンである魯肅ろしゆくが、劉表の弔問ちやうもんを名目に荊州の情勢ていせいを偵察しにやつ

てきます。

○孫策から孫権へ

第四回で孫策の江東平定について取り上げましたが、その後の展開についてここで解説しておきます。

孫策が江東で快進撃を続けていたとき、華北では曹操と袁紹が官渡で対決していました。孫策はこの機に乗じて許を攻撃し、曹操が擁した後漢の皇帝献帝を奪い取ろうとします。剛毅果断な孫策は、いちかばちかの賭けにでようと思いました。

しかしこのとき思わぬ事態がおこります。狩猟にかけた孫策が一人でいるところを、かつて孫策が殺した許貢（呉郡の元長官）の食客に襲われ、瀕死の重傷を負います。死を覚悟した孫策は、弟の孫権に後事を託します。

「江東の軍勢を率い、天下分け目の戦いをする点では、おまえはわしにかなわない。しかし賢人や有能な人物を任用し、それぞれに心を尽くさせ、江東の地を守り抜く点では、わしはおまえにかなわない（『三国志』孫策伝）」と。

「江東の小霸王」と異名をとった英傑の、あまりにも若い死でした。時に孫策二十六歳、孫

権は十九歳。

孫権は、周瑜しゅうゆや張昭など孫策の遺臣いしんのたすけを得て、着々と江東（長江下流域）の支配を固めていきますが、まさにその折おり、曹操の大軍が南下してきました。曹操は八十三万の軍を百万と号して、長江に沿って進軍してきます。ここで、孫権は、魯肃ろしゆくを劉備のもとへ向かわせませす。諸葛亮と出会った魯肃は、諸葛亮に孫権のもとへ同行するよう要請します。劉備もこれに同意し、諸葛亮は魯肃とともに、孫権のもとへ向かいます。

○魯肃と諸葛亮（以下は、『三国志』の内容からです）

劉備はかろうじて江夏まで逃れますが、そのとき荊州の情勢視察のために魯肃がやってきます。魯肃は、窮地きゆうちに立つ劉備に対して、腹心の部下を差し向けて孫権を説得し、同盟を結んで曹操と対抗するよう進言します。

諸葛亮と魯肃はどちらも、劉備と孫権が協力して曹操にあたることを考えていたのです。

魯肃が初めて孫権に会ったとき、魯肃は孫権に、曹操は強く今すぐに戦うことはできないので、江東に鼎峙ていじ（鼎かなえの三本足のようになつ）する状況をつくりだし、天下がどこかで乱れるのを待つて打ってでるべきだと提案しています。

魯肅はその構想にもとづいて、劉備と力を合わせ曹操に対抗すべきだと主張します。魯肅は当陽の長坂で劉備と面会し、劉備に孫権と力をあわせるよう説きます。

このとき魯肅は、劉備のそばにいた諸葛亮に、「私は子瑜しゆ（諸葛瑾の字。諸葛亮の兄）の友人です」と声をかけます。子瑜とは、孫権に仕えていた諸葛亮の兄諸葛瑾のことです。そして「二人は心を許しその場で交わりを結んだ」とあります。二人は肝胆相照らす仲になり、魯肅は諸葛亮をともない孫権のもとへもどってきます。

前に諸葛亮が劉備に示した「天下三分の計」も、北の曹操は強大で簡単に手を出すことはできない、そこで、江東の孫権と結んで曹操に対抗し、荊州と益州をとるとというのが基本構想でした。ですから、期せずして二人の戦略は同一方向を目指していたのです。

こうして、諸葛亮は孫権のもとに赴き、劉備と連合して曹操と決戦するよう孫権を説得することになります。

魯肅は諸葛亮をともない、孫権のもとに戻ってきます。孫権のもとには、曹操からの降伏勧告が届いていました。しかし、劉備と孫権が力を合わせて曹操の進出を食い止めるという点で、二人の考えは一致しています。

(本文抄)

孫権は曹操からの檄文げきぶんを見せながら言った。

「先日、曹操が使者をよこし、これをとどけて来た。それでひとまず使者を帰らせ、一同を集めて協議しているのだが、まだ結論は出ていない」

読みおわると、魯肅は言った。

「殿はいかがお考えですか」

「まだ決まっていない」と孫権。

と、張昭ちやうしやうが言うには、

「曹操は百万の軍勢を擁し、天子の名を借りて、天下四方を征伐しているのですから、これに刃向はむかえば反逆になります。しかも、情勢から見て、殿が頼みとできるのは、長江やうがです。しかし、曹操がすでに荊州を降したいま、長江の要害やうがいをわが方と分け合い、頼みとすることはできません。思いますのに、降伏することこそ、万全の策かと存じます」

幕僚たち一同も口々に言った。

「子布しふ（張昭の字）どの意見は、まさに天意にかなうものと思いません」

孫権は考え込んだまま口を開かなかつた。

張昭は重ねて言った。

「殿、曹操に降伏すれば呉の住民も苦しむことなく、江南の六郡はすべて安泰でございませう」
孫権はうつむいて答えなかった。

しばらくして孫権が廁かわやに立つと、魯肅は孫権のあとについて出た。

孫権は魯肅の意味ありげな様子に、その手をとって言った。

「きみはどう考えているのか」

「さきほど皆が言ったことは、すべて將軍を誤らせるものです。皆は曹操に降伏してもかまいませんが、將軍だけは曹操に降伏してはなりません」と魯肅。

「どういう意味か」と孫権。

「たとえば私が曹操に降伏したとして、私は郷里に帰らされても、州や郡の長官くらいになれるでしょう。しかし、將軍が曹操に降伏された場合、いったいどこに身を寄せるところがありませんか。官位は封侯ふうこう（諸侯）どまり、車はたった一台、馬も一頭のみで、従者もほんの数人にすぎません。二度と一国の主となることはかありません。皆の意見はそれぞれ自分のためのものです。お聞き入れになってはいけません」と魯肅。

「皆の議論は、はなはだ私を失望させるものだった。子敬しけい（魯肅の字）が言ってくれたこと

は、まさしく私の考えていたことと同じだ。これぞ天が私に子敬を授けてくださったというものだ。しかし、曹操は、すでに袁紹の軍勢を手に入れ、今また荊州の軍勢を手に入れたのだから、敵対するのは難しいだろうな」と孫権。

(解説)

張昭らの文官たちは、曹操は皇帝を擁して天下に号令している、またその強大な力には太刀打ちできないと、孫権に降伏することをすすめます。しかし魯肅は、彼らの議論は自分のためのもので、聞き入れてはいけなないと孫権にいいます。

そして魯肅は、諸葛亮が来ていることを孫権に知らせると、孫権は諸葛亮の意見を聞くこととなります。

翌日、諸葛亮は孫権との会見に先立ち、まず降伏論の文官たちと議論をしますが、次々と文官たちを論破します。要約すると、以下の通りです。

まずは、張昭。

諸葛亮に、あなたはみずから管仲かんちゆうや樂毅がっきをもつて任じているのに、曹操軍から領土を守ることができず、今は身の置き所もないありさま。管仲や樂毅は果たしてこんなふうだった

でしようか、と。

諸葛亮はこれに答えて、

劉備が劉表に身を寄せたときには、兵は千に満たず、大将は関羽・張飛・趙雲のみであった。しかも、新野は辺鄙(へんび)な小県で軍備も足りず、食糧の補給がつかない状態のなか、博望(はくぼう)の焼き打ち、白河(はくが)の水攻めによつて、曹操軍をきりきり舞いさせた。これは管仲や楽毅の用兵にまさるもの。また、荊州の混乱に乗じて、これを奪い取らなかつたのは「大仁大義(たいじんたいぎ)」のため。また、当陽(とうよう)の戦いで、劉備につき従う数十万の住民を見捨てずに敗北したのは、これも「大仁大義」のため。衆寡敵せず、勝敗は兵家(へいか)の常。昔、高祖(こうそ)（劉邦）は何度も項羽に敗北したが、垓下(がいか)最後の戦いで決定的勝利を収めた。つまり国家の安危については戦略が必要。弁舌(べんぜつ)だけのあなたが臨機応変の対応を求められるときに役に立たないようでは、天下の笑いものになりますよ、と述べます。

張昭は、返す言葉もなかつた。

次いで、陸績(りくせき)は、

劉備は中山靖王の末裔(まつえい)とはいえ、わかっているのは、ムシロを織りワラジを売る庶民だつたということだけ。これでどうして曹操と対抗できるのか。

諸葛亮はこれに答えて、

劉備は漢室かんしつの後裔こうえいであり、獻帝は系図を調査して爵位しやくいを賜った。前漢の高祖は亭長ていちょう（宿場長）から身を起こし、ついに天下を取った。ムシロを織りワラジを売っていたからといって、なにも恥ずかしいことはない。あなたは子供の見識しかなく、一流の識者と語り合う資格はない、と。

陸績はぐつと言葉につまった。

また、こうとも言います。

江東は兵は精鋭、食糧は充足しているうえ、長江の險要がある。にもかかわらず、あなた方は、自分の主君に膝を屈して逆賊に降伏することを勧める始末。しかし、劉備は逆賊曹操をものともしない。

このあとも虞翻ぐほん、步騭ほしつ、薛綜せつそうらが次々と発言しますが、いずれも一言で居並ぶ文官たちを黙らせてしまいます。そしてその後、諸葛亮は、孫権と出会って話をします。

（本文抄）

諸葛亮を案内して正堂せいどうまで来ると、孫権は階きざはしを下りて丁重に迎えた。大勢の文官・武官

は両側に並んで立ち、魯肅は諸葛亮の側に立って、彼の話に耳をすましてゐる。諸葛亮は、ちらりと孫権をうかがい見ると、青い眼に紫色の鬚、人を庄する風采である。

諸葛亮はひそかに思った。

「孫権は非凡な風貌だ。通りいっぺんの話し方では、説得するのは無理だろう。質問してきたら、わざと気に障ることを言つて挑発してやろう」

孫権は言った。

「魯子敬から足下の才能については、いろいろ聞いております。今、お目にかかれたうえは、どうか良策をお教えたいただきたい」

「私は非才無学の身ではありますが、なんなりとおたずねください」と諸葛亮。

「足下は近ごろ新野において、劉豫州どのを輔佐して曹操と決戦されたのだから、敵の内情を熟知されておられるでしょう」と孫権。

「劉豫州どのは兵も将も少なく、加えて新野は小城で食糧もありませんでした。これで決戦などとは到底いえません」と諸葛亮。

「曹操の軍勢は全部でどのくらいなのか」と孫権。

「騎兵・歩兵・水軍を合わせると、百万以上です」と諸葛亮。

「それは、曹操が大げさに言っているのではないのか」と孫権。

「いや、そうではありません。曹操は、兗州えんしゅうです。二十万の青州兵せいしゅうへいを擁してあります。

袁紹を平定して、五、六十万の兵を手に入れ、さらにまた中原ちゅうげんで新たに三、四十万の兵を召集いたしました。このたびはまた荊州の兵二、三十万を獲得しております。これらを合わせますと、ざっと百五十万は下りません。私が百万と申しましたのは、江東の方々が驚かれるのではないかと思つたからです」と諸葛亮。

魯肅は横で顔色を変え、しきりに諸葛亮に目くばせしたが、諸葛亮は目もくれない。

と、孫権は言つた。

「では、曹操配下の大将はどれくらいいるのか」

「智謀に富んだ参謀や戦いに熟達した大将は、千人や二千人ではききません」と諸葛亮。

「今、曹操は荊州を平定したが、この上まだ野心をもっているのだろうか」と孫権。

「今、長江沿いに砦を築き、戦船を用意しております。いうまでもなく、江東を攻めようと
しているのです」と諸葛亮。

「もしやつが江東を併吞へいどんする気なら、戦うべきか戦わざるべきか、あなたはどうぞお考えか」と孫権。

「私は一言申し上げたいことがあります、將軍にはお聞き入れただけですか」と諸葛亮。
「ぜひ、お聞かせ願いたい」と孫権。

「以前、天下が大いに乱れたとき、將軍は江東で兵を起こされ、劉豫州どのは漢水の南に依つて、曹操と天下を争わんとされました。今、曹操は袁紹を攻め滅ぼし、北方をおおむね平定し終わりました。近ごろはまた荊州を打ち破つて、その威勢は天下を震わせ、このため、劉豫州どのはここまで落ちのびられたのです。

どうか將軍にはご自身の力を考慮されて、彼に対処なさいますように。もし、呉・越の軍勢で曹操の大軍に対抗できるとお考えなら、すぐに絶交されたほうがよろしいでしょう。それができないのであれば、いさぎよく、兵を動かさずに鎧をぬぎ、曹操に臣下の礼をとられるのがよろしいでしょう」と諸葛亮。

孫権がまだ答えないうちに、諸葛亮は重ねて言った。

「將軍は表向きは服従するとみせかけて、内心は疑い迷っておられます。事態は急を要するの

に決断なさらなければ、禍は目の前ですぞ」

「まことにあなたの言われるとおりだ。では、劉豫州どのはどうして降伏されないのか」と孫権。

「劉豫州どののは漢王朝のご一族であり、その英才ぶりは天下に鳴り響き、おおぜいの人々から仰ぎ慕われております。事が成就じょうじゅしなければ、それは天命です。どうして身を屈して人の下につくことができましょうか」と諸葛亮は言った。

孫権はこれを聞くやさつと顔色を変え、袖そでを払って立ち上がり、奥へ入ってしまった。

(解説)

いよいよ、諸葛亮と孫権の初めての会見がはじまりますが、孫権の風貌ふうぼうを見た諸葛亮が、並みのやり方では説得は不可能、挑発して彼を怒らせるしかないと判断します。

諸葛亮の話に腹を立てた孫権は、奥に引っ込んでしまいます。しかし、これも諸葛亮の計算のうちでした。一旦は席を立て退室しますが、魯肅の意見を聞き、思い直してまた出てきます。

(本文抄)

孫権はまだ怒りがおさまっておらず、ふりむいて魯肅を見ながら言った。

「孔明め、無礼ではないか」

「私もそう言って孔明を責めましたところ、彼は反対に殿には度量がないと笑いました。孔明には曹操を打ち破る計略があるとのことですが、口に出そうとしません。殿はどうして聞くことなさいのか」と魯肅。

孫権はたちまち怒りを喜びに変え、

「なんと孔明には良策があるから、ああ言つてわざと私を怒らせたのか。一時の短慮たんりよで大事を誤るところであつた」と言つと、ふたたび正堂に出て、もう一度諸葛亮と話をすることにした。

孫権は諸葛亮にあやまつて言つた。

「さきほどは無礼な振舞ふるまひいをしたが、どうかお許し願いたい」

諸葛亮もあやまつて言つた。

「私こそ失礼しました。どうかお許しください」

孫権は諸葛亮を奥座敷に招き入れ、酒の支度をしてもてなした。酒が数回めぐつたあと、孫権は言つた。

「曹操が日ごろから憎んでいたのは、呂布・劉表・袁紹・袁術、それに劉豫州どのと私だけだ。今ではほとんどが滅んでしまい、残っているのは豫州どのと私だけになった。私は呉の

土地を差し出して、他人の支配を受ける気はない。私の心は決した。劉豫州どの以外、曹操に対抗できる者はいない。しかし豫州どのの敗北されたばかりだ。力を合わせて戦うことができるか」

「豫州どのの敗北されたばかりですが、関雲長かんうんちやうがなお一万の精鋭部隊を率いておりますし、劉琦りゅうきも江夏の軍勢を擁しており、これも一万は下りません。曹操の軍勢は、はるばるの遠征で疲労困憊ひろうこんばいしております。これは、いわゆる『強弩きやうこの末は、勢い魯縞ろこうも穿うがつ能わず（強い弩によって放たれた矢も、最後には魯の薄絹うすぎぬさえ貫けないほど威力が衰える）』という事態です。しかも、北方の人々は水戦に不慣れであります。

また荊州の將兵が曹操につき従ったのも、その勢いに圧迫されただけであり、決して心からではありません。今、將軍がほんとうに劉豫州どのと力を合わせ心一つにされたならば、必ずや曹操軍を打ち破ることができます。曹操軍は敗北すれば、北方に帰還するに相違ありません。そうなれば、荊州と呉の勢いが強まり、鼎足ていそく（天下三分）の形勢を作ることができます。勝負の分かれ目は、ただいま今日にあります。どうかご決断ください」と諸葛亮。

孫権は大いに喜び、

「先生のお言葉によって、目の前が開けたぞ。わが意は決した。異議いぎは無用だ。ただちに協

議して軍隊を出動させ、ともに曹操を滅ぼそうではないか」

(解説)

孫権は一度は腹を立てますが、思い直して、改めて諸葛亮に意見を聞く名場面です。

『三国志』も同様の内容で、諸葛亮は次のように述べています(以下、取意)。

諸葛亮は、劉備は敗れたとはいえ、まだ一万以上の軍勢を集めることができます。夏口かこうに駐屯する同盟軍の劉琦も一万以上の軍勢を保有しています。一方、曹操軍は遠征で疲労しきり、水戦にも慣れず、これらの条件を考え合わせれば、孫権・劉備の連合軍は勝利をおさめることができますと、曹操に対する勝利への展望を述べます。

この諸葛亮の意見は、孫権の意向にかなうものでしたが、大勢を占める降伏論を覆すくつがえこともまだ難しい。そこで孫権は、そのころ鄱陽はように駐屯していた総司令官周瑜しゅうゆを呼び寄せて、彼の意見を聞くことにします。それは次回で。